

成長の遅れたアユ種苗の放流魚としての評価

片岡 佳孝

◆背景・目的

飼育中に生じる「ビリ」個体の放流種苗としての適性が、元来放流魚として評価の高い湖産アユ種苗の評価を低下させるのではないかと懸念されるため、「ビリ種苗」と「通常種苗」を用いた河川放流試験とナワバリ形成試験を行った。

◆成果の内容・特徴

- 12月にエリで漁獲され飼育中に3回の選別で小型であったアユ群（「ビリ群」）と4月に漁獲され飼育中に2回の選別によりビリ個体を除いた群（通常群）を両群とも愛知川（東近江市政所町）に5月24日に放流し、5月28日～8月31日にかけて友釣りでの釣果を比較したところ「通常群」の方がよく釣れた（図1）。
- 水中ポンプで水流をつけた水産試験場内の屋外コンクリート池で両群のナワバリ形成を観察したところ、両群を混養した場合は、「通常群」が「ビリ群」に対して優先的にナワバリを形成したが、両群をそれぞれ単独で放養した場合には、両種苗ともナワバリを形成し、両群のナワバリ形成率に差はなかった。

◆成果の活用・留意点

- 「ビリ種苗」を「通常種苗」と同時に同一河川に放流した場合、両種苗とも友釣りで釣れてくるが「ビリ種苗」の釣果が劣ることが示唆された（「ビリ種苗」単独放流の放流効果については未実施のため、よく釣れる可能性は残る）。
- 様々な履歴の種苗を混合して放流した場合、「ビリ種苗」の存在によって釣果に影響を与える可能性があることから、放流の際には、種苗の履歴を十分に把握しておく必要がある。

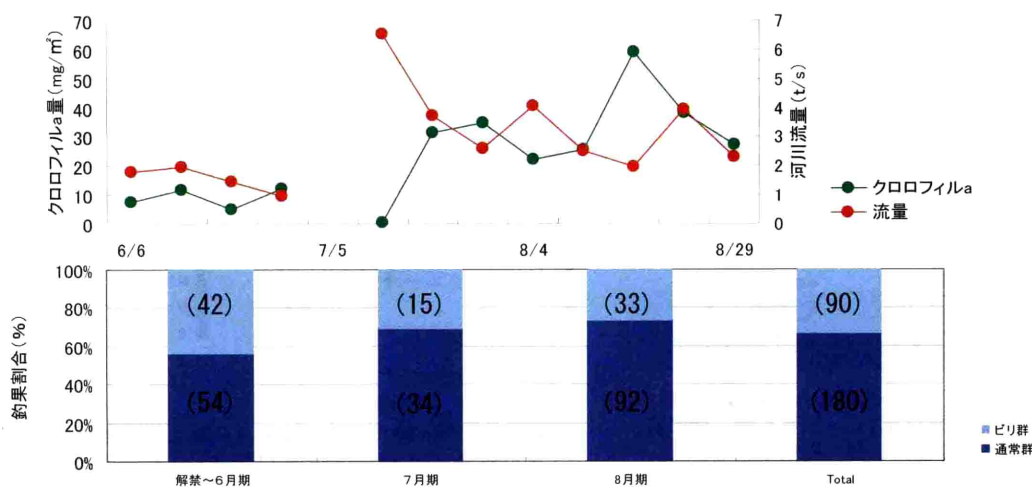


図1 漁期中の河川環境と友釣り釣果 ()内は尾数